



前橋信和先生のご退職に寄せて

著者	金 弘基
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	13
号	1
ページ	23-27
発行年	2021-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029631

前橋信和先生のご退職に寄せて

2019年度人間福祉研究科博士課程前期課程修了生 金 弘 基

1. はじめに

私と先生との出会いは、私が2014年に関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科に入学したのちの講義の場でした。入学当初から児童福祉に関心のあった私は、授業の内容は全く理解していなかったものの、「この先生が児童福祉の先生なんだな、覚えておかないと」と壇上で語られる先生を見て思っていました。そして、前橋先生をはじめとする人間福祉学部の先生方にソーシャルワークや対人援助職の魅力を教えて頂き、社会福祉士への道を歩むこととなりました。

大学を卒業して大学院に進学してからもゼミ生として先生との繋がりは続きました。研究のことなど何も分かっていなかった私が何とか修士論文を提出し、修士課程を修了できたのは前橋先生からの優しく温かいご指導の賜物です。

今回ご依頼を頂き、「決して真面目な学生ではなかった私でよいのかな？」と正直思いましたが、大変貴重な機会を頂いたことに感謝し、拙筆ではありますが前橋先生との思い出を振り返らせて頂きます。

2. 前橋先生との出会い

先述の通り、前橋先生との出会いは大学入学後の講義でしたが、より先生の近くで学ばせて頂くようになったのは、大学3年次の研究演習の授業からでした。入学時より児童福祉に興味を持っていた私は特に迷うこともなく、先生のゼミを希望しました。志望書を提出したのち、ゼミ発表が行われるまでは気が気でありませんでしたが、何とか先生のゼミに入ることができ、喜んだことを覚えています。

こうして希望通り先生のゼミに入ることが出来た私でしたが、恥ずかしいことに大学時代は非常にもったいない時間を過ごしてしまったと思っています。というのも、私は大学4年間を通して母校の中学校でサッカー部のコーチをしており、授業時間以外はサッカー漬けの毎日でした。中学生の子どもたちと毎日のように関わり、共に過ごした時間は現在の仕事にも繋がる力となったと感じる一方で、あまりにも大学生活を疎かにしすぎたと今となっては反省しています。当然、学業の方は散々で、ゼミの発表の直前まで資料作成をしたり、卒論も滑り込みで提出するというような有り様でした。

このようにあまり学業に身が入っていなかった私ですが、一人前に「大学卒業後は児童福祉の現場で働きたい!」という思いだけは持っていました。「学問的なことはよく分からないけど、直接子どもと関わることならできるはず!」とも思っていた私は、3年夏のソーシャルワーク実習で大きな転機を迎えることとなりました。

希望通り、児童養護施設と児童相談所で実習をさせて頂いた私は、実習を終えて2つの思いを抱くことになりました。それは、児童福祉の仕事に大きな魅力を感じる気持ち、そして自らの未熟さに愕然とする気持ちでした。実習を通して、日々バタバタと忙しいながらも児童に向き合う実習先の職員の皆様の姿を目の当たりにし、「やっぱり現場で働きたい!!」と将来を考えました。

一方で、自分にとって初めて出会う「クライアントとしての児童」と相対した時、「自分はいったいこの子のために何が出来るんだろう」と自分の無力さを強く感じ、「このまま現場に出ても、きっと何もできない」「もっと勉強しないといけない」とも感じました。そして、「もっと学ぶのなら大学院だろう」と非常に安直な考えではありますが、大学院進学を決意することとなりました。

そのことを先生に伝えた時には「いいと思うよ」「そうしたら研究テーマを決めていかないとね」とだ

け言われたのですが、今思えば私のような学生が大学院進学を口にしたのですから、「大丈夫だろうか」とご心配をおかけしたことと思います。実際、研究計画書の書き方すらままならず、夏休みの真っ只中に梅田キャンパスで個別指導をして頂いたことを覚えています。きっと先生も内心「やれやれ」と思っていたことと思いますが、こんな私も見捨てることなく、丁寧かつ優しくご指導をして頂きました。前橋先生でなければきっと大学院に入学することすらできていなかったと思います。

今振り返っても、非常に失礼な学生だったと思いますが、私は学部時代の2年間の思い返して先生から叱られた記憶が全くありません。発表が散々な時は「もうちょっと調べないといけないね」と優しいトーンで言われ、卒論の執筆が遅々として進まない時は「そろそろ急がないとなあ」とこれまた優しく諭されたことを覚えています。先生の優しさに大いに甘えさせてもらった大学時代でした。

3. 大学院時代

そんなこんなで大学院進学を決めた私は、実習での経験を経て「施設養育における支援の在り方」について関心を持つようになっていました。その中でも特に、「被虐待経験によるトラウマを念頭に置いた支援」に大きな関心を抱き、「社会的養護におけるトラウマインフォームド・ケア (Trauma-Informed Care: TIC)」を研究テーマの主軸に置くこととしました。

TIC は国内ではまだまだ萌芽期であり研究の蓄積も数少なかったため、私は先生のお知り合いを通じて2つの施設にてフィールドワークを行うこととしました。2つの施設はどちらも TIC に関心を持っており施設内で継続的に研修を行っている施設でした。「現場の実情を見ながら、研究をしていきたい」という当時の私には少々ハードルの高い要望でしたが、先生は、「それならば」と様々な施設・機関の方に掛け合ってくださいフィールドワーク先を決定することが出来ました。余談ですが、この際先生から出てきたお知り合いのお名前はどれも児童福祉界の著名人ばかりで「そんな人とも先生は知り合いなのか」と大変驚いた記憶があります。こうした繋がり豊富な現場で数多くの経験を積んだ前橋先生だからこそなのだろうと密かに感じていました。

こうして大学院生活がスタートした私でしたが、研究の進捗は遅々としていました。フィールドワークで直接児童と関わり、様々な考察をすることに楽しさを感じる一方で、中々研究テーマが定まらず焦りを覚える日々が続いていました。

1年目の秋学期のある授業で、学生が各々の研究テーマを発表し、それに対し先生からコメントを頂くというものがありません。まだ研究テーマがはっきりと定まっていなかった私に、その先生は痛烈なコメントをしてくださりました。そのことが強烈にショックだった私は、その後のゼミの時間で前橋先生に泣きつき、研究テーマを変更しようかと思っていると相談しました。すると先生は、ゆったりと私の話に耳を傾けてくださった後、「今話してくれた変更後の研究テーマも確かに面白いと思う」と肯定してくださった上で、「だけど、せっかくこれまで考えてきたことがあるのだから、焦って変えずに一旦ゆっくりと考えてみたらどうかな」と声をかけてくださったのです。落ち着いて考えた後、やはり元々考えていた方向性で研究を進めたいと思うようになっていました。あの時の先生の言葉がなければ研究そのものが大きく変わってしまっていたかもしれないと考えると感謝の気持ちでいっぱいです。

ゼミの時間はマンツーマンだったこともあり、私は毎週「ああだこうだ」と持論を展開したり、研究のことで悶々と悩んだりしていましたが、先生はいつも落ち着いた雰囲気、優しくアドバイスしてくださりました。先生としては指摘や修正したいことだらけだったと思いますが、そっと温かく見守っていただきました。きっとこれまでの付き合いの中で、私の頑固な部分や考え出すと止まらない部分をご理解してくださっていたのだと思います。

また、研究のことで頭がいっぱいになっている私を気遣ってか、時折研究とは関係のない話をすることもあり、「コーヒーでも飲もうか」と声をかけてくださり過ごした時間は私にとってホッと一息つ

くことの出来る癒しの時間でもありました。そうした時間にはフィールドワークの中で感じたことや考えたことをお話することが多かったのですが、先生が興味津々に私の話を聞いてくれたことがとても印象に残っています。私が大それたことにも「施設養育とはこうあるべき」というようなことを言ったときでさえ、楽しそうに話を聞いた上で、先生独自の視点から話をしてくださりました（様々な裏事情を知っている先生だからこその切り口が多く、聞いていてとても面白かったです）。先生は一見するとお静かで真面目な印象を受けるかもしれませんが、実はとてもお話好きでお茶目な部分がたくさんあることに気が付いた大学院生活でもありました。

2年目になり、なんとかテーマを固めた後は中間報告会にインタビュー調査、分析、そして執筆作業と1年目以上に慌ただしく、そして焦りながら過ごしていました。私は自分のことでいっぱいでしたが、たくさんの部分で先生に助けて頂いていました。

中間報告会の時には発表を終え、聴衆の先生方から質問を受けました。その際、上手く返答することが出来ていなかった私を見かねてか、颯爽と先生がフォローに入ってくださるということがありました。本来なら、発表の場で先生からのフォローを受けるというのは恥ずかしいことだとは思っているのですが、その時の私にとってどれほど心強かったか…。

2年目私はM1の頃と変わらず、自分の考えるままに進んでいったのですが、インタビュー調査を終えて逐語録を先生にお見せした際、「このインタビューは面白いね」と、ある方の逐語録を取り出しておっしゃったことがありました。そのインタビューは自分としても思い入れがあるもので話を聞いて私自身も引き込まれていったものでした。先生も同じように感じてくださったことが分かり、とても嬉しく思ったとともに心強く感じたことを覚えています。

また、論文のタイトルに悩んでいた私は、提出直前のゼミでも決めきることが出来ませんでした。そんな私を見かねてか、先生はわざわざ院生室まで来てアドバイスをしてくださったのです。今思えば、あの時先生が来て声をかけてくれていなかったら、自分の思いとは少しずれたタイトルとなっていたかもしれません。先生との関わりの4年間で、先生がわざわざ私のところへいらっしゃることはそれが初めてのことだったのでとても驚きました。それだけ、先生にご心配をおかけしていたのだと思いますが一方で少し嬉しくもありました。

そうやって、紆余曲折を経て完成した修士論文は最終的に優秀賞を頂くことができました。決して優秀な学生ではなかった私が何とか大学院を修了することが出来たのは、いつも私の意思や考えを尊重し、優しく論してくれる先生の下でのびのびと研究に打ち込めたからこそだと思います。また、修士論文を執筆する上で、2年間のフィールドワークの経験は計り知れないほど大きなものでした。そうしたフィールドワークを行う環境を整えてくださったのも先生の計らいがあつてこそでした。

4. ソーシャルワーカーとして現場に出て

こうして何とか大学院を卒業できた私は、この2020年の春から関西のある地方自治体に入庁し社会福祉士として働いています。配属は一時保護所で、希望していた児童の支援に携わることが出来ています。

今年は新型コロナウイルスの影響で、予定されていた新規採用研修のほとんどが中止となり、入庁後すぐに配属先で職務に当たるというイレギュラーな状況でした。いきなり現場へと入っていくことに少なからず不安は感じていたのですが、それ以上に「やっとやりたかったことが出来る！！」と嬉しい気持ちを感じたのが本音です。児童との関わりだけでなく、あらゆる業務で日々発見がある刺激的な毎日を送っています。

このように比較的スムーズに現場へと入っていった背景には、大学院でのフィールドワークが大きく関係しているような気がします。2年という長いスパンで2ヶ所の施設で児童と関わってきたことが自分自身の拠り所となっているように思うのです。

院生時代、フィールドワーク先で感じたことを先生にあれやこれやと話していると「金君はいい経験をしているね」とよく言われました。また、現場の中で感じた疑問を先生に投げかけた時はいつも一緒になって考えてくださりました。私が考えたことを決して否定せず、尊重してくれた先生のお陰で、「自分が考えていることは間違っていないんだ」と感じる事が出来たのだと思います。

今になって思うと、大学院の頃、フィールドワークやゼミで色々と考えていたことが、ソーシャルワーカーとして働きだした今に繋がっているような気がしてなりません。児童の前に相対した時、いつも色々なことを考えながら支援に当たります。「彼は今どんなことを考えているんだろう」「どんな状態なんだろう」「今の彼にとって必要な関わりは何なんだろう」と答えの出ない問いを自問自答しながら日々過ごしています。考えすぎるのはあまり良くない、という意見もあるかもしれませんが、大学院の頃からあれこれ考えることが好きだった私にとっては、むしろ考えなくなる方が不安だったりします。

残念ながら、今は週1回のゼミは無いので先生の力なしで、1人で試行錯誤をしないとはいけませんが、目の前にいる児童に何が出来るのか、そして自分がしたアプローチは正しかったのか、それをどこまでも実直に考えていくことがソーシャルワーカーとして大切なだと身に染みて感じています。

5. これからのこと

大阪府で長らく現場経験を積んでこられた先生と同じく、私も地方自治体で働いていることに縁や繋がりのようなものを少なからず感じています。

思い返せば、大学院の頃先生とは児童福祉の中でも特に、虐待対応や対策についてよく話をしました。厚生労働省にまで出向された先生のお話はとても面白く、ためになるものばかりで、現場経験が豊富で、様々な知識を蓄えていらっしゃる先生に憧れを抱いていました。そして何より、現場を知っているからこそ研究が分厚いものになるのだと大学院での学びを通して感じました。

福祉の現場では、研究と現場の乖離について議論されることが多くあるように思います。私自身、まだ社会人として働きだして間もないですが、そうしたギャップを感じる事が多々あります。研究の場で盛んに議論されているものが現場では受け入れられなかったり、そもそもそれについて考える余裕がないという現状を目の当たりにしています。

修士論文でインタビュー調査を行った私は、調査、分析、執筆という一連のプロセスを通じて、現場の声を掬い上げて研究に繋げることの面白さを強く感じました。また、今現在働いている中で、ふとした時に支援の中で自分が感じたこととインタビューさせて頂いた内容とが重なることがあると気が付きました。そうすると、修士論文での調査がまた違った切り口で見えてくるのです（ほんの少し研究をかじっただけの私がこのようなことを言うのは僭越ではありますが…）。

今は現場で実践を積み重ねることが自分にとって一番大切なことであると思っていますが、心の中には「また研究したい」という思いもあります。それはきっと、現場の声を聴くことの重要性、必要性を強く感じた大学院での2年間があったからこそだと思います。

日々支援に当たる中で、研究を現場に届けること、現場の声を研究の場に届けること、双方の重要性を痛感しています。一時保護所にやってくる児童は言葉に出来ないような体験をサバイバルしてきています。本来ならば、最も親密な関係を築くはずの養育者から裏切られ、深く傷つけられた児童もいます。そうしたクライアントにどのようなアプローチが求められるのか、それを論理立てて説明できるのが研究の力だと思うのです。

一方で、現場は日々ギリギリのところで踏ん張りながら多くの困難に立ち向かっています。多くの現場で疲弊感やネガティブな感情を抱えながらも目の前のクライアントのために支援を行う人々がいます。

いつになるかは分かりませんし、きっとまだまだたくさんの方の経験を積まないといけないのだと思いますが、私はこの両者の溝を埋めていけるような、現場を少しでも良くすることの出来る実践・研究をしたい

と思っています。

6. おわりに

私の中で前橋先生は波風の立っていない海のようなイメージです。穏やかで温かく、いつもフラットでした。じっと静かに話を聞いてくれる安心感があるのです。豊富な現場経験があるのにも関わらず、そうした態度でいつも接してくれるのは、きっと先生のお人柄の良さが滲み出ているのだと思います。

先生のことから、ご退職された後もきっと色々なところから声がかかり、お忙しい日々を送られることと思います。どうかお体にお気をつけて、ご自愛ください。大学時代のゼミの同期も先生のことが大好きで、大学院時代はよく私のところに「先生は元気？」と連絡が来ていました。きっと先生の穏やかな姿にみんな安心を感じていたのだと思います。私が入庁して以降は、まだお会いできていませんが、募る話がたくさんありますので、また美味しいご飯をみんなで食べに行きましょう。これからも私たちを温かく見守っていただけると幸いです。

本当にお疲れさまでした。ありがとうございました。